

2025 年 7 月 27 日 聖霊降臨節 第 8 主日礼拝

メッセージ「^{じんかん}人間に神ともにいます」

牛田匡牧師

聖書 マタイによる福音書 15 章 15-20 節

今日、はじめに歌いました賛美歌「イエスさまいるってほんとかな」は、ニュージーランドのセシリー・シーハイというカトリックのシスターが、1980 年に創られた子どもたちのための賛美歌だそうです。子どもたちの口を借りて「イエス様がいて本当かな？ 今でもいるって言うけれど。見たことないけれど」と質問されるところから歌い始められるこの歌は、大人にとってもドキッとするような、子どもたちだけに限らない、身近でかつ真剣な問いを正面から取り上げた歌だと思います。この歌は「マタイによる福音書」の巻末にあるイエス様の言葉「私は世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」(28:20)に基づいて、その言葉に応答する形で創られたそうです(『こどもさんびか略解』)。

この世界の歴史の中で、2000 前にパレスチナを生きられたイエス様が、時と場所を超えて、今も私たちと共に生きておられるとは、一体どういうことなのでしょう。今を、現代社会の中を生かされている私たちは、目に見えない「神」を、いつ、どこで、どうやって、見るのが、感じるのが、接することができるのでしょうか。そのことについて、第 2 節以降に続けられています。

「2 イエス様いるって本当だよ。パンを分け合い、見つめ合い、
嬉しいことも悲しみも、分け合う輪の中に」

「3 イエス様いるって本当だね。御言葉聞いて、パンを裂く、
みんなの中にイエス様は、いつもいてくださる」

ここで気付くのは、パンを分け合ったり、お互いに見つめ合ったり、嬉しいことも悲しいことも語り合ったりするような、人々の輪の中に、イエス様は今も確かに共におられる、ということです。イエス様は「私は、いつも『あなた』と共にいる」ではなく、「『あなたがた』と共にいる」(マタイ 28:20)と言われました。またクリスマスに生まれる時にも、その名は「インマヌエル」と呼ばれると預言されていましたが、このヘブライ語は、「神は『私たち』と共におられる」(マタイ 1:23)という意味でした。これらの言葉からも、人が独りであるのではなく、二三人以上の人が集まって過

ごしている所に、神様も共におられると語られていることが分かります。

とはいえ、人は「神」を求める時、また「神」と出会おうとする時、日常を離れて、一人になろうとすることもまた、紛れもない事実ではないでしょうか。イエス様自身も祈る時には、仲間たちを離れて、人里離れて一人になって祈っていることがしばしばありました。群衆の喧騒を離れ、誰からも邪魔されることなく、心静かに、一心に神に向かって祈る……。そのような祈りの姿は、古代から世界中で、国も場所も文化も宗教も超えて、行われて来ていたのだらうと思います。自分たち人間の力をはるかに超越した大きな存在である「神」の前に、謙虚になってひざまずき、頭を垂れて、一心に祈る時に、神様からの応答が得られる……。そのための特別な場所としての、「聖なる空間や時間」というものが、昔から世界各地に、それぞれの宗教にも用意されて来ているのだらうと思います。

しかし、神と出会うことができるのは、そのような特別な時と場所だけではない、ということも、聖書は教えてくれています。世俗とは隔離された特別な時と場として、「聖なる空間や時間」を設けると、そこに参加できる人と参加できない人という区別、分断が生じます。イエス様はそのような聖なる神殿祭儀に与ることができず、穢れていると見なされていた人たちと共に交わり、そのような人々の交わりの中に、輪の中にこそ、神が共におられると伝えられました。そのようなイエス・キリストの言葉と振る舞いを思い返す時、私たちがどこに神を探せばよいか、その答えは明確なのではないでしょうか。

今回の聖書の言葉「二人または三人が私の名によって集まるところには、私もその中にいるのである」(マタイ 18:20)からも、そのことは明らかでしょう。15 節から始まっているこのお話は、「きょうだいがあなたに対して罪を犯したなら」ということで、「仲間の一人の人との関係性について、どうすべきか」ということについて、イエス様が教えられたという形式になっています。しかし、詳しく見ていくと、これらの言葉は、歴史の中を歩まれたイエス様には遡らないようです。例えば、17 節には「教会」という言葉がありますが、イエス様が仲間たちと一緒に旅をされていた当時は、もちろん「教会」はまだありませんでした。イエス様も仲間たちも、ユダヤ教徒でしたから、「会堂」に出入りしていました。4つある福音書の中にも「教会」という言葉が登場するのは、この「マタイによる福音書」だけです。

また同じ 17 節の後半「もし、教会の言うことも聞き入れないなら、その人を異邦人か、徴税人と同様に見なさない」というのも、イエス様らしくない言葉です。この言葉はつまり「交わりを断ちなさい。二度と交流してはならない」という意味ですが、イエス様自身の振る舞いは、そのような罪人とみなされていた徴税人たちと、反対に積極的に交わりをもっていくような言動でした。

むしろ、これらのお話のポイントは、「一人ではない」という所にあるのではないかと考えられます。16 節には、「すべてのことが、二人または三人の人の証言によって確定されるようになる」という言葉がありますが、この言葉はヘブライ語聖書の中の「申命記」の言葉「どのような過ちや罪であれ、人が犯した罪は一人の証人によって確定されることはない。人が犯したどのような罪も、二人または三人の証人の証言によって確定されなければならない」(19:15)に基づいています。一人だけの訴えでは裁かれないことによって、被告が守られるようにと定められていた律法です。

またこのお話の前後に並べられているお話も、迷子になってしまった一匹の羊が失われないように、他の 99 匹たちも協力したというお話(18:10-14)であったり、きょうだいの罪を 7 の 70 倍まで、つまり「いつまでも何度でも赦してあげなさい」、「天の国の王様は家来の莫大な借金をも帳消しにしてくれるのだから、あなたたちも同じようにしなさい」というお話(18:21-35)でもあったりしました。

それらのことを考えると、このお話の要点は、後半の 19 節 20 節「どんな願い事であれ、あなたがたのうち二人が地上で心を合わせるなら、天におられる私の父はそれをかなえてくださる。二人または三人が私の名によって集まるところには、私もその中にいるのである」にある、と言っても差し支えないのではないかと思います。

そもそも日本語、古代の大和言葉においても、「神」は「隠り身(かくりみ)」で、姿が見えないもの、と理解されていましたが、また「鬼」も同様に「隠(おぬ)」として目に見えないもの、として理解されていましたが、そのように目に見えない不思議な力、不思議な働きというものを、私たちはいつどこで体験することが多いかというと、やはりそれは一人で、聖なる場所で、と言うよりも、むしろ、やはり仲間たちとの間で、人と人との交わりの間で、実感することの方が明らかに多いのではない

かと思います。一人と一人の力は小さくても、二人三人と集まって一緒に何かを行う中で、1+1が2以上、3以上の働きをすることがあります。そしてそれらは目に見えて、数えることのできる成果だけに限定されるものではなく、お互いの胸の内、心境の変化としても、実感されるものではないでしょうか。

例えば、一緒に話すうちに、当初は予想もしていなかったけれども、お互いに深い話をする事ができて、慰められたり、励まされたりした。どうしてそうなったのかは分からないけど、不思議と心が穏やかになったというような経験は、多かれ少なかれ、誰にでもあるのではないのでしょうか。そのような時、「運が良かった」「偶然だった」と言うことも勿論できますし、また「恵まれた」「神様が共にいて下さった」と言うこともできるのではないかと思います。

「人間」と書いて、「にんげん」「ひと」と読むのではなく、「人の間」として「じんかん」と読むと、広くは世間、世の中一般の意味になるようですが、そのまま字に書いたとおりに「人と人との間」という意味で理解することも許されるのではないかと思います。先日7月第2週は、日本基督教団の「部落解放祈りの日」で、私たちもあらゆる差別からの解放を祈る礼拝を持ちました。今からもう100年以上も前になりましたが、1922年に全国水平社創立大会が開催され、そこで採択され宣言された「水平社宣言」という宣言文があります。その最後の言葉は、「人の世に熱あれ、人間に光あれ」でした。ルビで「にんげん」という読み仮名が振られていますが、この宣言文を起草した西光万吉自身が、「ほんとうは『じんかん』なんです」と後年、永六輔とのインタビューの中で答えていたそうです（永六輔「ぼくが出会った西光さん」『部落解放』1995年390号、解放出版社・1995年6月10日発行）。「この世界に熱さがあるように。人と人との間に光があるように」……。この水平社宣言が目指している世界、そこには紛れもなく、人々の間に神も共にいて働いておられる、インマヌエルの神が共におられる、と言えるのではないかと思います。

人と人との間、^{じんかん}「人間」に今日も神が共にいます。そのことに信頼して、私たちもここから歩み出して参ります。そしてまた私たちが会おう方々との間で、神が共におられることを、示し、証していくことができるように、それぞれに小さな器として用いられていきます。